

緑濃き桜並木

会長 采女 博文

今年は春も初夏も慌ただしくすぎて、盛夏を迎えた。家族が居宅型介護支援事業所、救急車、ママサポートタクシー、救命救急センター等多くの人のお世話になった。改めて現場の労働環境の厳しさに触れた。

甲突川河畔の桜並木を散策する余裕もなかった。桜は病院隣の公園と県庁のものを愛でて満足することにした。ツクシ、ツワ、ワラビなどの山野菜も食べ損なった。アク抜きのために一晩水につけてどうこうという春ではなかった。

ハァ〜ビュと苦しげな呼吸音のする 2、3 か月児を脇に置いて午前 3 時ころのミルクやりとおむつ交換を分担する。互いの存在を確かめつつ添い寝する不安な夜を過ごす。カンカンという始発電車の通過音が聞こえるとほっとする。この齢になってようやく女性の育児、介護の負担に社会がタダ乗りしているのを知る。高度経済成長期を象徴する専業主婦の時代は去った。今働く女性に育児、介護の重い負担がかかる。

今皆が愛でる甲突川河畔の桜並木も、かつて誰かがエイヤーと決めて、誰かが段取りをし、誰かが苗木を育て、植えた。未来への贈り物である。今、緑濃い桜並木を歩きながら、このような贈り物にかかわった経験がないのを少し寂しく思う。桜の木を伐るような無粋な役割を演じてはいないと思うけれども。

川面を渡る風は心地よいけれど、口ずさむフレーズが、千の風になって、さとうきび畑、Blowin' in the Wind とかだと寂しい。病室には四季もない。ツツジ、紫陽花と季節は移り、夏野菜の美味しい季節を迎えているけど。「病牀六尺」の世界を支える子規の妹の生活をふと思う。落ち葉の舞う季節まで、陽気に、風に吹かれて行こう。